

書評

入谷秀一著

『バイオグラフィーの哲学——「私」という制度、そして愛』

(ナカニシヤ出版、2018年)

三浦 隆宏

ソフトカバーに「ですます調」の文体と一見柔らかな体裁をとってはいるが、騙されてはいけない。本書は、著者が「これまで、幾度か論考にまとめ、発表してきた」(290頁)《バイオグラフィー(自伝、評伝)》について、「より包括的で、煮詰めた考察」(291頁)を行なった、まぎれもなく一つの哲学書なのである。

ハイデガー研究から出発した入谷が、2013年に刊行した大著『かたちある生 アドルノと批判理論のバイオグラフィー』(大阪大学出版会)には、最後に「バイオグラフィーの哲学的問題圏へ／自己と他者との間で」と題する部が設けられており、そこでは一方で「オートバイオグラフィー」に関する概説的な問題提起が(第十章)、また他方ではアドルノに仮託しつつ、そのバイオポリティークが素描されていた(第十一章)。その萌芽が数年のときを経て、いわば全面開花した本書は、著者の言うとおりに、「バイオグラフィーに関する議論や問題をある程度網羅し」たうえで、「一種の海図のようなものを教科書的に描こうともした」ものであって(291頁)、日本人の作家としては朝井リョウの『何者』(2012年刊)から野坂昭如のありとあらゆる著作や、あるいは村上春樹によるオウム真理教の信者や元信者らに対するインタビュー集を、海外の思想家や作家としては、アウグスティヌスとルソーの『告白』にはじまり、フロイトの代表的な著作やアリス・ウェクスラーの自伝、さらにはブリーモ・レーヴィやクロード・ランズマン、そしてミシェル・ウェルバックへと、壮大な知のタペストリーを織りなしてみせる、その筆力はまさに圧巻のひとつである。「大学で一般学生向けの哲学、倫理学の入門講座を担当して」(291頁) いるとはいえ、入谷はいっさい手を抜いていない。「それぞれの専門領域の専門性の水準を大きく下回ることなく」(同前)、本書は記述

されており、読者にも相応の知見が要求される(もっとも知らない人名や語はググればいだけだ)点は、明記しておく必要があるだろう。

とはいえ、第5回講義でのフロイト論が顕著なように、「非常に難解な説明」(90頁)であるフロイトのテキストを「恋愛」や「いじめ」を例にして「かみ砕いて」説明しており、読者が置き去りにされることはない。いささか過剰とも言えるほど頻繁に長ダッシュ(——)を用いて、著者の他なる声を忍び込ませるのも入谷の文体が有する特徴の一つだろう。もっともそのぶん、本書の分量もやや嵩んでしまったようで、親しみやすい哲学・倫理学の入門書を数多く出版しているナカニシヤ出版にしては、一頁当たりの文章量がかなり多くなるとともに、文字のフォントもやや小さくなってしまったように思われる(普通に精読すると、一回当たりの講義を90分で読み通すのがおそらく困難な章もある)。また著者自身が、「作図した本人がそこかしこで迷い、漂流しているような印象を受ける」(291頁)とも記しているように、たとえば84頁の5行目で「親しき者の生に光を当てると同時に」と、「同時」が「当時」と誤記されていたりもして、このあたりはご愛敬といったところだろうか。

ところで、書評の任務とは、読み手を実際にその当該書籍を読むことへと誘うことであろう。その意味で相応の字数を与えられた書評には、あるジレンマが存在する。仮に簡潔ではあったにせよ、その著作の全体の内容を跡づけておくと、読み手はその書評を読むことですっかりその本を読んだ気になってしまい、実際に自分で読もうとしなくなる恐れがあるからだ。だから、今回評者は本書の内容を逐一跡づけることはしない。可能な限り、みなさんが実際に本書を手にとってみようと思ってもらえるよう評したい。

さて、入谷は「はじめに」で『バイオグラフィー』の現状をこう診断する。「自己語りの営みは、二〇世紀後半からさらにドラスティックな変化を経験しつつあります」(8頁)。それはつまり、「欲望と快楽の源泉としての自己愛が、強制と制度の源泉としての自己愛に変化しつつある」(同前、傍点は原文)ということにほかならない。そして、

それを示す例として直木賞受賞作でもある小説の『何者』を取り上げる(第1回講義)。昨今の就活大学生——主人公である拓人君の心のうちに対して、著者は「ライトノベル程度の発話というか、だから何?としかいいようのない、解説めいた言説」(24頁)と辛辣だ——の自己語りを、「結局のところ、小さいことが気になるものの、それを行儀よくまとめて、心のうちに記載する、そういう備忘録めいた作業」(同前)と断ずる、この掴みは(本書が大学の講義形式で書かれていることから)巧みであると言えよう。

ついで著者は、「個人的なものに見える自己愛が、神の愛や隣人愛という、垂直的かつ水平的な規範と交差するメカニズム」(33頁)をアウグスティヌスの『告白』に見出し(第2回講義)、そのまま『告白』を中心としたルソー論(第3回、第4回講義)、そしてフロイト論へと進んでゆく(第5回、第6回講義)。というのも、「フロイトによる「無意識」の発見は、「私」の告白のうちに潜む他者の存在、その意識せざる影に注目することと深く関係して」(82頁)いるからである。この前半部は、『バイオグラフィー』を主題にした西洋思想史の概説となっており、読んでいて勉強になる。また、その過程でなされる、フーコーやアーレント、クリステヴァ、デリダ、ラカン、コネルといった現代の思想家たちへの言及も見事だ。とはいえ、ここまでであれば、本書はありがちな哲学・倫理学の入門書の域を超え出ことはなかつただろう。本書の白眉は、その先にある。

第7回講義の冒頭で入谷は、「西洋の歴史上、女性は、発言し、想像する主体ではなく、男性によって見られ、視かれ、想像される客体の位置に固定化されるのがほとんどでした」(115頁)と述べたうえで、「女性たちの告白には、よりはっきりと他者 [= 「つまり、これまで自分たちから、語りにまつわるあらゆる力を奪ってきた男(性社会)という権威的他者」] が、あるいは他者の巨大な影が登場せざるをえないのです」(116頁)とつづけ、「自分たちについて彼らが持つイメージをまずもって揺さぶる、という困難な課題に取り組」(同前、傍点は原文)んだ例の一つとして、アリス・ウェクスラーの『ウェクスラー家の選択』

を取り上げる(第7回講義、なお第11回講義では、この国でかつて大量に生まれた「戦争未亡人」たちのバイオグラフィーが間接的に示されもする)。同書については、冒頭でもふれた本書の原型をなす一篇(『かたちある生』の第十章)でも論じられていたが、本書では記述が大幅に拡張され、非常に読ませる内容となっている。そして、ここでも著者は、アリスの自伝を検討した結果、直面するにいたった「自伝という文学ジャンルの抱える問題」(132頁)を論じるにあたって、人権活動家のリゴベルタ・メンチュウヤポール・ラウリツェンあるいはクラウディア・ミルズらを参照してゆくという驚くべき視野の広さを示すのである。

そのうえで、評者がかつとも舌を巻いたのは、第9回講義と第10回講義の二回にわたって展開された「野坂昭如の様々な「私」」を副題とする野坂昭如論である。「あとがき」の最後で野坂の「全てのことが、いつか辻褄が合えばそれでいいのだ」(293頁)という言葉を引きしていることからしても、入谷にとって「野坂昭如」という一人の作家が、ある意味ハイデガーやアドルノにも比肩するぐらい特権的な存在であったのは確かであろうが(そして、それは入谷と同年生まれの評者にもある程度わからないではないが)、「実際、彼ほど「私」という存在に固執し続けた作家を、私は知りません」(148頁)、または「野坂にとっての畢生のテーマは、戦争以上に、家族です」(149頁)という言葉のもと、彼の複雑極まりない「家族」関係を、そして「家族に対する野坂の固執」(152頁)や「後になればなるほどあからさまに表明する、家族愛への徹底した懐疑」(157頁)を詳細に掘り起こしてゆくくだりには、ただ唸らされるしかなかった。

対談や語り下ろしといったお手軽な書籍が泡のように現れてはすぐに消えてゆく出版業界の構造的な不況のなか、本書のように著者の真の教養がおのずと滲み出た人文書は一つの希望である。道中で適宜挟まれる以下の文言——「興ざめを徹底することこそ哲学の特長です」(20頁)といった哲学観や、「教員採用を目指して百以上の大学を受けた私自身の経験」(28頁)という体験談、あるいは「むしろ私たちは、幻想の中に生きている。

その方が常態なのです」(95頁)という人間観に、「ついでにいうと、生命について口上を垂れる文系インテリの内には、こういう朦朧とした表現を、あたかも彼自身が教説を他者に吹き込まんが如く、長々と繰り返す者もいます」(224頁)といった毒舌——も、本書を飽きずに読み通すうえで一種のスパイスとして効いている。

著者は冒頭で「いわば哲学とは、いまだ建設中の巨大な建物であり、その建物の中に大きな部屋、小さな部屋、古い部屋、新しい部屋などがあり、しかもそれぞれの部屋の仕切りが時代状況に応じて取っ払われたり、急に仕切りができたり、思わぬ抜け道によって距離を隔てた部屋同士が接続したり、あまり人気のない部屋があったり、住民同士が喧嘩ばかりする部屋が並んでいたりする、こういうイメージで捉えるるとよいのではないでしょうか」(4頁)と述べていたが、本書はまさにそのイメージを実地で体現した哲学書なのであり、味読に値する(本書の言葉を借りれば、「心揺さぶられるもの」(180頁)がたしかにある)文字通りの名著である。